

子どもたちを遊びの達人にしよう

—遊びは子どもの文化、ぼくもわたしもこま名人—

文・写真 小林泰之（静岡支部）

かつて、子ども達は、帰宅すれば、地域の神社等が集まり、日が暮れるのも忘れて、夢中になって四季折々の様々な遊びを楽しんでいた。そこでは、異集団の子ども達が集まり、ルールや約束等を決め、独自の子ども達だけの世界を展開していた。その中で、見よう見まねで、また、四苦八苦しながらもいろいろな遊びを、技を獲得していった。

しかし、いつの間にか、子ども達の世界は断ち切れ、その楽しみも遊び文化も継承されなくなり、さらには、子ども達の身体の発達・発育にも影響を及ぼし、生活や体育の授業にも大きな課題を投げかけている。

そこで、“遊びの復権”こそが、子ども達の独自の世界を甦らせ、蝕まれた身体をよみがえさせる糧になると考え、“子ども達を遊びの達人にしよう”を合言葉に、独楽遊びを中心に、退職後も幼・保育園、小学校、大学、生涯学習センター等に出向き、どの子にも、独楽の回る楽しさを伝えようと“子ども生き生き遊び研究室”を立ち上げ、活動を展開している。

子どもたちに、こまを回す楽しさを

今、子ども達は、お正月にこまを回す機会はほとんどなく、テレビゲームに明け暮れている子が多いのが実状である。また、野外で思いきり、汗をかき、友達と一緒に元気よく遊ぶ姿も見られなくなった。

それゆえ、自分の身体を使って、自分の手で紐を巻き、こまを回すことは苦手である。実際、始めて体験してもらおうと「紐が巻けない」と言って投げ出す子や投げる構えもぎこちなく、体をしなやかに駆使し、こまを回すこともできない子も多い。

そこで、初心者でも練習を重ねればできる紐の巻き方、こまの持ち方、投げ方はどのようにすればよいのか、つまずきのある子に注目し、そのつまずきが解消できる紐の巻き方、こまの持ち方、投げ方等の課題に取り組んだ。



こまの種類いろいろ

三ツ目ゴマのこまの持ち方と紐の巻き方

子ども達は、様々な三ツ目ゴマの持ち方をする。この持ち方でこまを投げ、回そうとすると回る時と回らない時がある。回る確立が悪い。

その原因は、三つある。一つは、持ち方である。この持ち方だと初心者はこまがぶれやすく、安定しない。もう一つの原因は、軸にかける紐のかけ方である。保育園などでは、最初の紐のかけ方をわかかにしたり、結び目を軸に入れたりする方法を教えている。この方法は、まだ手の動きが不器用な子には軸に簡単にかけられる。でも、こまを回す時、紐が離れにくく回りにくいのである。

そこで初心者がどのようにこまに紐を巻きつけ、こまを持てばより回る事ができるのか、つまづいている子にひもの巻き方とこまの持ち方を何通りか変えて何回か投げてもらった結果、下記のような紐の巻き方とこまの持ち方で、投げ方を教えていけば、多くの初心者でもこまが回るようになった。



紐の巻き方とこまの持ち方

※芯の所に結び目がきていないと、投げた時、こまは回らず遠くへとんでいってしまう。



①まず、右利きの子は、左手にこまを持ち、右手で紐を持つ。



②こまの上部に紐をかけ、短一方の紐の上に長い方の紐をのせ、長い紐をひっぱり、片方の結び目が芯の所にくるようにする。



③こまを横向きにして持つと、きちんと紐が巻ける。



④芯に強く2周ほど時計回りに巻きつける。



⑤芯に巻きつけた後は、ゆっくりこまの上部の方に巻いていく。



⑥もう一方の結び目が小指にさしかかったら、紐を離さずに、親指と人差し指を広げ、鉄部を両指で持つ。



⑦紐がゆるまないように、しっかり紐がうず巻き状になっているか確かめる。



⑧こまの上部と手のひらが同じ方向を向く。

※片方の結び目は小指の所にくる

左利きの紐の巻き方とこまの持ち方



⑨左利きの子は、こまを右手に持ち、紐は左手に持つ。最初のこまの上部の紐の巻き方は右利きの子と同じ。



⑩巻き方は右利きと同じ方向に巻きあげる。



⑪もう片方の結び目が小指の所に来たら、親指と小指を開き鉄部を挟んで持つ。



⑫持ち方は手のひらとこまの上部が同じ方向を向く。



⑬右利きと左利きのこまの持ち方、親指が身体の外側を向く。

こまを投げる構え方



⑭膝を曲げ、こまは腰の少し後ろ。親指が少し下を向き構える。



⑮腕を伸ばし、手のひらが上を向く事を意識し投げる。

(投げる前にこまを持ったままの練習をする。)

構えてから、こまの向きを確認し、腕をのばして止める。心で1、2、3と数えてから構えの姿勢にもどす。

投げ方には二通りある。男投げと女投げ(ひきごま)と子ども達は呼ぶ。技の発展段階を見通した時、基本の投げ方は男投げをマスターした方が、次の技へと発展できると考え、指導にあたる。

一斉指導ゆえ、一人一人の手の位置を確認し、その姿勢、投げ方を理解させていく。



教師にもその巻き方を伝え、上手に巻けない子には、実際に手ほどきをする。紐を巻いては持ち、また紐をほどき紐を巻く。何回も繰り返す事によって、紐の巻き方と持ち方になれさせていく。



子どもたちを遊びの達人にしよう

こま台は、ベニヤ板一枚の大きさ。周りにこまが外に出ないように縁を取る。こまを持ったまま、数回投げる練習を繰り返し、本番。一回目で回る子は少ない。何回か練習していくうちに、投げるコツを覚えていく。四苦八苦しなながら、なんとか回そうとするが、なかなか回らない子もいる。

あらかじめ、回るポイントはどこにあるのか、指摘してきた。

【ポイント1】最初、芯に紐をかけ、結び目がきちんと芯の所にきているか。(図②)

【ポイント2】紐の巻き方はゆるくなく、うずまきのように巻いてあるか。(図⑦)

【ポイント3】こまの上部と手のひらが同じ方向に向いているか。(図⑬)

【ポイント4】投げた時、腕が伸び、手のひらは上を向いていたか。



全員を集めさせ、その4つのポイントができていのか話し合い、確認する。「どこにつまづきがあるのか」「どこを直していけば回るようになるのか」その視点がわからなければ、アドバイスはできない。全員で話し合った後、グループで全員が回せるように練習をし、うまく回らなかった子には作戦会議と称し、教え合う機会をつくり、さらにグループで練習させていく。

その後、どのグループがより多くこまが回せるのか、チャンピオン大会を開く。教えた子が回せるようになったのか、確認の場として、また、グループの絆を深めるために、競いあわせるのにも大事な場であると考え、その場を設定した。

全員が回った時の子ども達の表情はひとしおである。四苦八苦し、やっと教えてもらった子が、始めて回った時の喜びの笑顔、教えた子も「やった」と歓声をあげ、喜び合う。

全員ができたら次の技へと挑戦する。次は、「箱入れ」(30cm四方のお盆)、さらには横20cm縦10cmのお盆へと挑戦。やっているうちに、どのように投げれば箱に入るのか、その感覚がわかってくる。

その感覚がつかめてくると、次への技「缶のせ」(直径27cm高さ30cm)、さらには(直径15cm高さ17cm)に挑戦させていく。何度か技の挑戦をしていくうちに、姿勢にも変化がでてくる。無駄な力がぬげ、リラックスし、「缶のせ」の技に挑戦する姿が見られた。缶の上で連続して回せる子もでてきた。さらに、次の技へと挑戦するために「空中手のせ」「ひもかけ手のせ」等の技を披露し、その技ができるためのコツを話し合わせ、技へと挑戦させていく。

四苦八苦し、始めてこまが回った時の喜び、うれしさは決して忘れない。歓声をあげ、こおどりしている姿は印象的である。

こまが回った喜びが自信となり、次への技へ挑戦しようとする意欲が湧く。目の色を変え、夢中になって仲間と一緒に技を競い合う。時にはくやしさも味わう。困った時には「弟子にしてください」と仲間をお願いすればいいと伝える。できるための4つのポイントがわかれば、アドバイスができる。

魅力があり、全身をぶつけていける遊びには、いつまでも夢中になって取り組む子ども達。どの子にも、“こまを回す楽しさ”“みんなで遊ぶ楽しさ”より多くの子どもや大人たちにも味わってほしいと願い、どんな手順で指導していけばどの子もこまを回せるようになるのか、その系統的指導方法を模索していった。

今後も、子どもたちの遊び文化を継承させていくために、様々な場に出向き、実践していき、指導者も育成していきたい。



幼児には「ふきごま」から与えていくと、1才児でも指1本で回せるようになり、興味を示し、回る喜びをどの子も味わうことができた。

